

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 10 月 7 日現在

機関番号：82512

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530611

研究課題名(和文)「近代化変圧器」としての開発援助～開発社会学の定立を目指して～

研究課題名(英文) Development Aid as a Modernization Transformer

研究代表者

佐藤 寛 (Sato, Hiroshi)

独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・その他部局等・研究員

研究者番号：50403613

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本の開発研究・開発援助研究の場における社会学の重要性・有用性の任地を高めることを目的に様々な研究活動を行った。この結果、開発学関連の他のディシプリンの研究者ならびに、開発援助の実務者の間における「開発社会学」認知度向上と、今後開発社会学に参入する研究者のためのインフラ作りに大きな成果を得たと考える。

前者については特に国際開発学会の学会誌での「開発社会学特集」をきっかけに「開発社会学部会」を設置して、社会学関連の知見の統合を試みた。後者については、「開発社会学を学ぶための60冊」の出版準備を完了させた(2015年7月に明石書店より刊行予定)。

研究成果の概要(英文)：In our 3years study, we completed two main goals. One is to increase the reputation and recognition of "Development Sociology" in the circle of Japanese Development studies (especially in Japan Society for Development Studies). We have succeeded in publishing the special issue of "Development Sociology" in JASID journal of "International Development" in which our entire study team member contributed. Based on this issue, we made up a study team of Development Sociology within JASID. The other goal was to publish introductory book for development sociology in Japanese. We have finished the preparation job for the volume named "Introductory book guide for Development Sociology" (in Japanese), which contains 60 basic books for the beginners of development Sociology (to be published July 2015).

研究分野：開発社会学

キーワード：開発社会学 開発援助 貧困削減 近代化 社会開発

1. 研究開始当初の背景

研究計画を立案した平成 23 年(2011 年)時点では、わが国の開発研究において「開発社会学」の成果はほとんど明示的に示されていない。その要因は二つある。

第一に国際開発学会(JASID)に所属する諸ディシプリンの研究者(例えば開発経済学、開発人類学)などと比べると「開発社会学」は開発研究の中で学問分野としての認知が低かった。

第二に日本の社会学者の中で途上国の問題を研究対象としている者は増えていたが、それら研究テーマが開発問題に関連していても自らの研究を「開発研究」の中に位置づける者が少ない状況にあった。

研究代表者以外の本研究計画の参加者は、途上国を研究対象としつつ様々な社会問題に社会的にアプローチしていたが、例えば「環境社会学」「ジェンダー研究」「農村社会学」などに類似研究に仲間を見出すことはあっても、「開発問題」を中心に議論する機会はほとんどない状況であった。

他方、研究代表者は「開発援助」を研究対象に据えた「援助研究」を 10 年来続けていたが、そこでは開発援助の実務者からのニーズにこたえて実践的な知見を提供することはあっても、社会的な理論枠組みや概念を駆使して、開発援助現象を分析する仲間を見出すことは困難であった。

このため、「開発社会学」という学問分野を明確に打ち出すことで、途上国を対象とした研究を行っている社会学者や、開発実務を実践・研究しながら社会的な分析枠組みを利用したいと考えている人々が終結するようなプラットフォーム作りを行うことが必要であると考えられた。

「開発社会学」をこのプラットフォームとすることによって、社会的アプローチを開発学のサークルの中で広く認知せしめ、同時に他のディシプリンから開発問題にアプローチしている研究者とその知見を共有することが出来ると考えられた。また、どのようにして社会的な分析ツールを、開発研究に用いることができるのかについての知見を他のディシプリンの研究者に示すことも可能になると考えられたのである。

2. 研究の目的

上記の問題意識の下に、(1) 開発研究の中における「開発社会学」の固有の貢献は何か、(2) 社会学における「開発社会学」の固有の貢献は何かのそれぞれを明らかにすることを通して、わが国における「開発社会学」の定立を準備することを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

研究の土台として、まず第一に研究代表者、研究分担者(4 名)が分担して、それぞれの関心分野(ダム建設、農村開発、社会開発、ジェンダー問題など)、関心地域(東南アジア、南アジア、中東など)における自身の開発社会学的研究を継続して実施した。

第二に、共同研究の柱となる作業として、これまで日本の社会学者が行ってきた日本国内、国外における調査研究の中から「開発社会学」の要素を持っているものをピックアップし、それらの研究を開発社会学的な視点から整理する作業を本共同研究の中心的な作業とした。この作業は主として国際開発学会の「開発社会学部会」などの場を利用して進めた。

この一連の「社会学者との対話」の試みの中で、小倉和夫(津田塾大学)、町村敬志(一橋大学)、児玉谷史朗(一橋大学)、徳野貞雄(熊本大学)、宮島喬(立教大学)、新田目夏実(拓殖大学)、宮内泰介(北海道大学)などの社会学者と充実した意見交換を行うと同時に、これらの社会学者に「開発社会学」の認知を促すことにも一定の成果があった。

他方、大学院生、国際開発の実務者などを対象に「開発社会学」の入門的なカリキュラムを実験的に策定し、実際にこれを用いたゼミナール形式の勉強会を実施することで、開発社会学に対する認知を広める活動も行った(2012 年、2014 年)。

2012 年に開催した一連の「ゼミナール」では、各回ごとにテーマを設定し、開発社会学関連の課題図書を読むことで多様な参加者に「開発社会学」的な分析枠組みを体験してもらった。具体的なテーマは第 1 回「開発と近代化」、第 2 回「社会的起業家」、第 3 回「公正と正義」、第 4 回「開発は悪魔の碾き臼か」、第 5 回「満腹と幸せと開発の関係」、第 6 回「開発と社会関係資本」、第 7 回「社会的排除と包摂と開発」、第 8 回「幸福論は開発に革命を起こすか」、第 9 回「お金がないと出来ないこと、お金じゃ出来ないこと」、第 10 回「開発と文化と社会学」であった。この 2012 年のゼミナールでは、社会学を専攻する大学院生も数名参加し、社会学教育における「開発社会学」の可能性についても多くのヒントが得られた。

2014 年のゼミナールでは、中央省庁の若手官僚も数名参加し、援助実施機関の若者、研究者との間で活発な議論が行われた。具体的なテーマは、第 1 回「社会はどこに向かって進むのか～近代化と近代生活批判」、第 2 回「世界を巻き込む仕組み～オリエンタリズムとマクドナルド化」、第 3 回「社会を改善する～正義と支援」、第 4 回「社会を観測する～地図と踏査」、第 5 回「農村と都市」、第 6 回「差別とスティグマ」、第 7 回「押し寄せる開発とコミュニティー」、第 8 回「貧困者の戦略」、第 9 回「開発と資源」、第 10

回「制度と政策をお薦めするということ」であった。

こうしたゼミナールの蓄積によって、開発社会学を大学等で教える場合のカリキュラムのあり方、教授方法などについても多くの示唆を得ることができた。

4. 研究成果

研究代表者、研究分担者はそれぞれ各自の研究成果を学会等で報告したが、最大の成果は以下の二つである。

第一は国際開発学会の機関誌『国際開発研究』2012年11月号において、本研究会メンバーを中心とした特集《開発/発展をめぐる社会学の位相》を組み、刊行したことである。

本特集では研究代表者の佐藤寛が序文「特集に寄せて」を執筆し、この中で開発学における社会学の位置づけと今後の展望を記した。

また、総説論文に小倉充夫氏の寄稿を得て、1980年代に同氏が『開発と発展の社会学』を出版して以降の、社会学分野における開発問題の位置づけの変遷を振り返った。

さらに、研究分担者の浜本篤史、佐藤裕の共著論文「開発社会学の研究系譜とアプローチ～国内外の社会学における蓄積にもとづいて」は、上記3「研究方法」で述べた「これまでの社会学における開発関連業績の再整理」作業の集大成ともいえるべき論文で、この論文によって日本の社会学がこれまで「開発問題」をどのように取り扱ってきたのかをオーバービューすることができるようになった。

これに続いて、研究分担者の佐藤裕が「グローバル化と慢性的貧困～開発社会学の視点から」と題して、インドにおけるフィールドワークに依拠しつつ、慢性的貧困の問題を展開した。

同じく研究分担者の佐野麻由子は「開発援助プロジェクトとサステナビリティ～社会学的制度論からのサステナビリティの検討」と題して、インドネシアで行われた援助プロジェクトを事例に、開発行為のサステナビリティについての論考を行った。

同じく研究分担者の辰己佳寿子は「農村開発/発展の社会学的アプローチに関する一試論～生活改善をめぐる個人と社会」と題して、戦後日本の生活改善運動と呼ばれる農村開発の事例を、社会学的に分析した。

この特集号は、本研究計画の重要な成果の一つと位置づけられよう。

第二の成果は、開発社会学の初学者向けのリーディングスとして、『開発社会学を学ぶための60冊』の刊行準備を行い、2015年7月に刊行の運びとなったことである。

研究代表者、研究分担者を主たる執筆メンバーとして、これ以外の社会学者にも協力を

仰ぎ、開発社会学を初学者が学ぶために必須と考えられる60冊を選び、これらについて見開き二ページ程度の簡潔な紹介を執筆し、その中でそれぞれの書籍の「開発社会的な意義」を加えることで、非常にユニークなリーディングスとなった。

同書では60冊を8章に分けているが、章立ては第1章「進化・発展・近代化をめぐる社会学」、第2章「途上国の開発と援助論」、第3章「援助行為の本質の捉えなおし」、第4章「押し寄せる力と押しとどめる力」、第5章「都市・農村の貧困の把握」、第6章「差別や社会的排除を生み出すマクロ-ミクロな社会構造」、第7章「人々の福祉向上のための開発実践」、第8章「目に見えない資源の活用」となっている。この章立て、ならびに取り上げた書籍は、これまでに実施した「ゼミナール」の蓄積がふんだんに活用されている。

本書は、わが国ではじめての開発社会学の導入のための書籍であり、本書の刊行によって本研究会の活動目的の大半は実現されたと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

・辰己佳寿子・佐藤寛「特集に寄せて」(pp.1-5)

・浜本篤史・佐藤裕「開発社会学の研究系譜とアプローチ～国内外の社会学における蓄積に基づいて～」(pp.11-29)

・佐藤裕「グローバル化と慢性的貧困～開発社会学の視点から～」(pp.31-45) 2014年国際開発学会賞授賞

・佐野麻由子「開発援助プロジェクトとサステナビリティ～社会学的制度論からのサステナビリティの検討～」(pp.47-57)

・辰己佳寿子「農村開発/発展の社会学的アプローチに関する一試論～「生活改善」をめぐる個人と社会～」(pp.73-88)

以上いずれも『国際開発研究』第21巻1/2合併号 2012年・国際開発学会

[学会発表](計 件)

[図書](計1件)予定

・佐藤寛・浜本篤史・佐野麻由子・滝村卓司編『国際開発を学ぶための60冊』2015年7月・明石書店

[産業財産権]

なし

[その他]

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者 佐藤 寛 (SATO Kan Hi roshi)
日本貿易振興機構アジア経済研究所上席
主任調査研究員
研究者番号 : 50403613

(2)研究分担者
辰己 佳寿子 (TATSUMI Kazuko)
福岡大学経済学部教授
研究者番号 : 80379924

浜本 篤史 (HAMAMOTO Atsushi)
名古屋市立大学人文社会学研究科准教授
研究者番号 : 80457928

佐野 麻由子 (SANO Mayuko)
福岡県立大学人間社会学部准教授
研究者番号 : 00585416

佐藤 裕 (SATO Yutaka)
国際教養大学 国際教養学部助教
研究者番号 : 40534988